

[論文審査結果]

論文提出者：白 薩日娜

審査対象論文：中国の識別された民族のアイデンティティに関する社会学的研究—東北地方の達斡爾民族を事例に一

論文審査委員：井上治教授、坂部晶子准教授（名古屋大学）、飯田泰三教授、李曉東教授、江口伸吾准教授

【論文審査結果の要旨】

2013年10月12日、学内審査委員4名、学外審査委員1名により論文審査が行われた。白薩日娜氏が提出した学位請求論文は、全165頁を有し、形式上は問題がないことが確認された。また学位請求論文提出に先立ち、全国学会での学術報告を行ったことも確認された。北東アジア開発研究科では、学位請求論文提出に先立ち、レフェリー付き学術雑誌に単著論文を一本は掲載しておくことが望ましいとされている。2013年10月12日現在、白薩日娜氏はレフェリー付き学術雑誌『北東アジア研究』に論文を投稿しており、現在査読審査が進行している状況にある。単著論文一本という条件は学位授与の必要要件ではないため、学位請求論文の審査に支障はないことが確認された。

多民族国家として知られる中華人民共和国には、圧倒的多数を誇る漢民族と、漢民族よりも人口の少ない55の少数民族が存在する。この、中華人民共和国を構成する1+55の諸民族を確定した政治作業を「民族識別工作」という。この工作を通じ、それまでは民族と見なされてこなかった人間集団が、国家の政策によって民族であるとして「識別」され、国家の政策によって「〇〇民族」、「〇〇族」であることを承認された。こうした「識別」という人為の加わった人間集団を、nation や ethnos、「みんぞく」と区別するために、白薩日娜氏は「民族」の中国語発音 minzu をルビとして「民族」と表記することを主張している。本要旨もこれ以降は白薩日娜氏の表記方法に従う。

白薩日娜氏の論文は、中華人民共和国の「識別された民族」の一つである達斡爾民族を事例とし、そもそも中国における民族とはどのような根拠によって、どのようなプロセスによって民族と識別されたのか、識別された側はその識別プロセスにどのような動きをもって臨んだのか、人為的に識別された前後の彼らのアイデンティティにはどのような変化があったか、という問題意識を持って執筆されたものである。このような問題意識から出発して、白薩日娜氏は、中国の識別された民族は、識別する側の中央政府の支持ならびに識別される側の民族エリートの活動と民族側民衆の参与による共同作業の力で形成される、民族の形成を通じて伝統の一部が復活するとともに新しい民族伝統も作られる、一連の民族工作を通じて達斡爾民族の文化と民族のアイデンティティが形成される、という3つの創造・創出にかかる初歩的な仮説を設定するとともに、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの伝統の創造論を、研究の全体にかかる作業理論として設定した。

以上の問題意識と初歩的仮説の検証を想像の共同体論と伝統の創造論に則して行う本研究の基本的方法は、現地における聞き取り調査から得られた情報を解釈し分析する社会学的方法に加え、文献資料の解釈と分析を主とする歴史学的方法が採られている。また、民族概念、国民と民族統合、民族の創造、「小民族」論、ダフル人（白薩日娜氏は識別前の達斡爾民族人をダフル人と表記する）/達斡爾民族の歴史と文化にかかわる先行研究のレビューも丹念になされており、ことに民族概念、国民と民族統合、民族の創造、「小民族」論に関するレビューからは、白薩日娜氏が学術上の問題として意識している諸項目が未解決の学術的課題であることがよく理解できる。また、国家が創造する民族という人的集団の意味内容の実態的解明、識別され統合された民族の統合体という側面からの中国国家論にも、有益な示唆を与える可能性のある研究となることが期待されることが了解された。

白薩日娜氏は、第1章で達斡爾民族の識別について扱った。第1節では、中国の民族識別工作の全体像を概観しつつ、民族として識別される側に与えたインパクトの大きい作業として、民族識別工作の第一段階で実施された中国中央政府からの中央民族訪問団派遣、少数民族代表の国慶節への招待、民族地方での少数民族幹部の養成、民族高校の設立、少数民族の貿易・教育・衛生に関する調査などの活動が、少数民族地域において、その後続く民族識別活動への雰囲気醸成する役割を果たしたと、識別基準として民族の四つの特徴（共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素）以外、識別される側が持つ民族意識と民族への願望が持つ重要性を明らかにした。第2節では、達斡爾民族の識別過程を考察し、ダフル人が達斡爾民族として識別されたことにおいては、中央政府による民族政策以外の部分で、ダフル人のエリートたちがダフル人は単一民族であることを主張し、それに党・政府が注意を払うようになったことも重要であり、中央政府とダフル人エリートたちの共同作業の結果であるという新たな見方を提示している。この章を通じて白薩日娜氏は、中国における民族の創造と民族識別を検討する時には、中央政府の役割だけではなく、創造される側、識別される側の役割が重要な意味を持つことを主張した。

第2章では、達斡爾民族の創造と民族文化の創出、とくに、民族として識別された後の達斡爾民族の政治的創造と文化の創出について考察を行った。第1節では、民族として識別された1950～60年代に、達斡爾民族は、自己の民族名称、自己の民族自治地域、大量の自民族幹部を養成した。文革時の一時停滞を経て1970年代末からは民族経済と民族文化の建設の重要な民族工作目标となって、政策を通じての達斡爾民族の創造、つまり達斡爾民族の政治的創造は一層活発化し、自己の自治条例を制定し、自民族幹部の数を増やし、新たな達斡爾民族地域も増えた、などの一連の事実を明らかにした。そして白薩日娜氏は、こうした達斡爾民族の政治的創造とは、国家が、達斡爾民族という名称とその名称を帯びる達斡爾民族が存在する場所を達斡爾民族に与えた、たとえば、名称と自治地域を持つ民族にふさわしい実体的要素を収めるための「器」を準備したという、これまで提起されたことのない民族識別・創造論を展開している。第2節では、現在、達斡爾民族の文化

と認知されている要素が民族識別後に創出され、伝播と認知を得て、定着・拡大していることを跡づけた。1950～60年代には、学者たちの研究によって、民間から文化を収集する活動が積極的に行われ、民族文字・民族史・民族の伝統（飲食、居住、服飾、交通、社会組織、婚姻、葬式、祝日、礼儀、タブー、宗教信仰、神話、民間伝承、詩歌、音楽、踊り、ゲーム、民間体育）が明示的に創出されたこと、これら民族の文字・歴史・伝統が上に述べた「器」に収める実体的要素に他ならないこと、創出された文化は民族文化幹部が組織・実行した民族文化活動において応用・実用され民族文化の広範囲にわたる伝播と認知に大きな役割を果たしている」と論じている。続く1970・80年代からは、民族文化の伝播が重要になり、それを担う民族文化機関や施設の創設・建築、学校での民族文化教育も始まった。とりわけ、達斡爾民族文化を専門に研究する達斡爾学会が達斡爾民族の各集中地域に設立され、達斡爾民族の民族文化の創出と宣伝に大きく貢献したこと、こうした伝播活動が功を奏して達斡爾民族の民衆が政府主催の民族文化活動に積極的に参加するようになったばかりか、現在では、インターネット上の掲示板で民族文化の交流を広範に展開するまでに至っていることを明らかにした。こうした文字・歴史・伝統の存在、学会・学校・文化諸機関での研究・教育・民族文化活動などの諸事実はすでに明らかになっているが、これらを民族文化の創出とその伝播という観点から捉え直して体系づけたのは氏の画期的創見である。第3節では、創出した民族文化を伝統化する過程を検討した。民族文学、民族の祭典、民族体育、民族舞踊、民族食品など民族文化の要素は、上述した達斡爾民族の学者による歴史学的研究によって達斡爾民族が獲得した民族史の上に位置づけられることで、民族の伝統となった。つまり、歴史を作ること、これを通じて達斡爾民族は民族の内実としての民族伝統文化を持つ民族となったことを明らかにした。このように、「伝統」となることの本質を歴史構築による時間の獲得に求め、各要素が過去・歴史を付与される過程を明確に示したことは着目すべき見解である。

第3章では、達斡爾民族のアイデンティティについて検討を行った。達斡爾民族の名称と創出した民族文化は、達斡爾民族が自らの存在を他民族の人間に向けてだけでなく、自民族に向けて主張する手段を整えたという点で、達斡爾民族としての明確なアイデンティティの形成に大きな役割を果たしていると考え、以下のような考察を展開している。第1節では、民族識別前のダフル人には清朝期のダフル人エリート知識人には「ダフル・ソロン」というアイデンティティがあり、民国・満洲国期のダフル人のエリート知識人たちにはダフル人アイデンティティとモンゴル人アイデンティティが重層化しているアイデンティティがあった。新中国で民族識別工作が展開すると、ダフル人幹部の中には自分たちは「民族」であるというアイデンティティが芽生えはじめた。また、ダフル人のアイデンティティには、出身地によるアイデンティティの差があり、内モンゴルのハイラル地方のダフル人はモンゴル人とダフル人という二つのアイデンティティを持っているが、モリダワ達斡爾族自治旗と黒龍江省地方のダフル人はダフル人のアイデンティティしか持っていない。また、職業によるアイデンティティにも差があり、エリート

知識人は農民よりも強いアイデンティティ意識をもっていると主張する。そして、その要因として、ダフル人エリート知識人が“モンゴル”の名の下に行った政治活動があったという歴史的要因、モンゴル人とモンゴル人居住地からの距離という地理的要因、エリート知識人・学者・知識人・農民という階層的要因により、モンゴル人との交流の濃淡と民族に関する知識の多少の違いによるものであると説明する。この部分の考察から導き出されたダフル人のアイデンティティの諸相は、ダフル人エリート層がモンゴル人のアイデンティティを有していたとの既存の見解を受け継ぎ、さらにこれを発展させ、単層的ではなく重層的、地域と階層による多様性の存在までも明らかにしており、従来の見解を凌駕し、独自の見解に至っている。

第2節では、識別された達斡爾民族のアイデンティティを考察した。このアイデンティティには、達斡爾民族人が「達斡爾民族」という民族呼称によって形成した民族としてのアイデンティティと、民族文化によって形成した民族としてのアイデンティティがある。民族呼称によって形成した民族としてのアイデンティティについては、調査対象となった現在の達斡爾民族人の60代から10代までの8人全員が達斡爾民族としてのアイデンティティを持っている。達斡爾民族として識別された後には、ダフル人が持っていた複数のアイデンティティは達斡爾民族としてのアイデンティティが単一化し、年齢・職業・地域によってアイデンティティの強さに差が生じた。このような達斡爾民族としてのアイデンティティの変遷・変化は、①ダフル人のアイデンティティから達斡爾民族としてのアイデンティティへ、②モンゴル人のアイデンティティから達斡爾民族としてのアイデンティティへ、③少数民族のアイデンティティから小少数民族のアイデンティティへ、④エリートのアイデンティティから大衆的アイデンティティへ、とまとめることができると述べる。①と②はかつてのダフル人のアイデンティティが弱体化消滅しつつあることを踏まえている。③は達斡爾民族が少数民族であるにとどまらず、内モンゴルの少数民族の中でも人口がより少ない鄂温克民族と鄂倫春民族とあわせて三少数民族として同一範疇の少数民族であるという考えが達斡爾民族人に広まりつつ現状を踏まえている。④は自分が達斡爾民族であることが、各種の民族文化活動によって啓発されたり学習した達斡爾民族一般大衆が広く共有するようになったことを踏まえている。一方、民族文化によって形成された民族としてのアイデンティティ（白薩日娜氏はこれを民族文化的アイデンティティと呼ぶ）の形成は、まず達斡爾民族知識人と民族文化幹部の中に起こり、次第にそれ以外の民族の人々の間にも形成された。達斡爾民族知識人と民族文化幹部の民族文化的アイデンティティは民族文化の研究と収集によって形成され、ほかの達斡爾民族人のアイデンティティは達斡爾民族学者の著書と民族文化幹部の開催した民族文化活動を通じて形成されたものであると論じている。この章で明らかにした、達斡爾民族のアイデンティティの諸相とその形成過程は、従来の研究で明らかにされたことがない。白薩日娜氏の研究の画期性と独創性が現れている。

そして結論では、中国の少数民族の形成過程を民族としてのアイデンティティと関係づ

けて以下のようにまとめる。中央からの働きかけ（民族政策・民族工作）によって、識別される側は自分たちは何らかの共通性を持った集団である民族であると「想像」する。そしてその「想像」を中央政府と識別される民族側のエリートが識別活動を通じて「創造」して実現する。このような「想像による創造された共同体」である民族は、民族名称と民族自治地域を有するので、その名称と地域の地理的特性からイメージされる文化的特長を帯びた存在であると「想像」され、学者・知識人・幹部が民族の歴史・文化・伝統を「想像」通りに「創造」し、民族の伝統文化を獲得する。民族としての名実ともに想像され創造された。ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの作られた伝統論を踏まえると、中国における少数民族とは、民族識別をきっかけとして獲得した民族名称と民族自治地域、この二つに相応して想像され創造され伝統化された民族文化、さらに民族名称と民族文化によって形成されている民族としてのアイデンティティを持っていると想像する人々が創造した共同体、さらに端的に言うならば「想像と創造の共同体」である、と定義する。言うまでもなく、「漢民族に比して人口が少ない」ことがこれに加わる。重ねて強調しておきたいのは、中国における民族の創造は、政府による政策を通じての創造なのではなく、政府による識別を通じ、民族側の人々が創造した民族文化を通じての創造なのであるという点と、創造の結果として、民族としての実体がそこにあるという点である。

また、この研究で達成できなかったこととして、中国のマジョリティである漢民族について詳述できなかったこと、中国の一少数民族のみを事例にしたに過ぎないものであり、中国全体の民族論としては不完全な段階にあること、中国という多民族国家における国民形成の問題に論及できなかったこと、そしてこれらはすべて白薩日娜氏にとってのこれからの課題であるとして論文を締めくくる。

白薩日娜氏の論文は、達斡爾民族を事例として、これまで全く明らかにされてこなかった中国における民族創造の過程を詳細に明らかにすることに成功している。しかも、民族が太古の昔からある自明の存在であると考えてきた論者にとって、中国の民族とは人為によって作られるものであることを、これほど見事に描ききったこの研究を衝撃をもって受け取ることであろう。中国における民族の特殊性に注意が及んだ場合、中国ではおおむね本質論的な研究が、中国国外では民族の枠組みに対する批判的な研究がなされる傾向にあるが、白薩日娜氏はその枠組みに人々がどのように参加するのかが論じられており、従来からあった議論の限界を乗り越えた面があることも評価できる。そして、このような画期性と独創性のある研究を支えているのが、白薩日娜氏が現地調査を通じて収集した新史料と、達斡爾民族が識別される過程に直接的間接的に関与・参与した大勢のダフル/達斡爾民族人古老に直接面会して集めた貴重な証言である。後者に関して言えば、審査委員一同、史料的な価値を持っているとの高い評価を与えた。

一方、アンダーソンの想像の共同体論の扱い方をめぐり、作業理論として用いる理論が結論を構成するための枠組みとなり、論文全体の研究結果をもって想像の共同体論が中国

の民族創造を説明することに成功することを目指そうとする意図が理解できない、果たしてそのような結論はこの研究で必要か、という批判と疑問が呈された。この点とも関連して、民族、民族、ネーション、エスニックグループ、エスニシティ、マイノリティなどの用語の概念規定を明確にしていなかったため、白薩日娜氏が中国の民族をネーションかエトノスのいずれに理解しているのかが明確ではないという問題があり、このため、元来はネーションに関する議論である想像の共同体論を中国の民族に関する議論に用いているのは不適當ではないか、迫害や差別を受ける者であるマイノリティと少数民族である達斡爾民族との関係が議論されていないが、迫害や差別を受ける者であるマイノリティという観点はこの研究にはどのように反映されているのか、との質問が呈された。さらに想像の共同体論の扱いに関して、アンダーソンが論じているのはネーション・ビルディングという均一性を作る作業であるが、ネーション内部に均一性を作り出すことになる少数民族を作る識別工作がなぜ行われたのかが説明されていない、といった問題点が指摘された。さらにネーション・ビルディングにもかかわる問題点として、どうして達斡爾民族エリートが単一民族だと考えたのだろうか、実はそのような考えは中国共産党側が与えたのではないか、という疑問と、中央政府にとっては単一民族が統合のためにはより有益だと思われるが、個別の単一民族を主張したダフル人に対して中央政府はどのようなイメージを持ったのか、という質問が呈された。また、アイデンティティという実態の把握と定義の難しいことばを安易に使っているが、白薩日娜氏が明らかにしたと主張する「アイデンティティ」とは日本語でどのように説明する概念なのかを質す必要があるとの指摘があった。さらにアイデンティティに関連して、文革時に達斡爾民族が経験したと思われる出来事は彼らのアイデンティティにどのように影響したのか、また、識別前にモンゴル人と行動をともにしたダフル人たちは自分たちが結果的に達斡爾民族として識別されたことをどのように受け止めたか、という質問も示された。

これらの問題点、疑問、質問を中心に、公開審査での口頭試問ならびに最終の口頭試問で質すこととした。

#### 【口頭試問の結果の要旨】

公開審査での口頭試問は、白薩日娜氏による論文要旨紹介ののち、質疑応答が行われた。論文要旨は所定の20分で過不足無く説明されたので、直ちに質疑応答に入った。

まず、文革時に達斡爾民族が経験したと思われる出来事は彼らのアイデンティティにどのように影響したのか、との問いには、文革当時は民族的活動は一切できなかったとのみ回答し、文革と民族アイデンティティとは関連しないという見解を示した。次に、識別前にモンゴル人と行動をともにしたダフル人たちは自分たちが結果的に達斡爾民族として識別されたことをどのように受け止めたか、との問いに、関連する資料が地元の文書館で発見されなかったが、そのような人物の実際の活動からは単一民族として尽力したことは分かっていると回答した。次に、元来はネーションに関する議論であるアンダーソンの想

像の共同体論を中国の民族に関する議論に用いているのは不適當ではないか、との問いには、白薩日娜氏が想像の共同体論を用いたのは、ネーションの統合を説明しようとしたのではなく、そのネーションを構成している民族の統合を説明しようとした、と回答した。次に、白薩日娜氏に「アイデンティティ」を日本語でどのように説明しうる概念なのかを質したところ、この研究では民族意識の意味で理解してよいとの回答があった。次に、迫害や差別を受ける者であるマイノリティという観点はこの研究にはどのように反映されているのかとの問いに対し、白薩日娜氏は、自分は少数民族とは漢民族に比べて人口が少ない集団として理解していて、不平等や差別を受ける者としては理解していない、と回答した。アンダーソンが論じているのはネーション・ビルディングという均一性を作る作業であるが、ネーション内部に均一性を作り出すことになる少数民族をどうして作るのかが説明されていないとの指摘に対して、識別工作は新中国が民族平等政策を行うために必要であったと回答した。次に、どうして達斡爾民族エリートが単一民族だと考えたのだろうか、実はそのような考えは中国共産党側が与えたのではないか、という疑問が示された。これに対して白薩日娜氏は、ダフル人が自分たちを単一民族であると意識するようになったのは新中国の新しい政策と識別工作を通じてであるとの考えを示した。また、中央政府にとっては単一民族が統合のためにはより有益だと思われるが、個別の単一民族を主張したダフル人に対して中央政府はどのようなイメージを持ったのかという質問に対し、1950年代の資料が少ないため説明することはできないとの回答が示された。最後に、達斡爾民族が持つ多様なアイデンティティは、結局のところは政治的に「持たされた」ものと考えべきではないか、との問いに対し、彼らのアイデンティティは彼らが形成したものであると考えるとの回答があった。

以上の質疑応答には、白薩日娜氏は、審査委員からのほとんどの質問に対して氏自身の見解を明らかにすることができており、適切に回答したと評価してよい。確かに、質問の意図を十分に理解していないのではないと思われる回答や質問者ならびに審査委員の個人的見解とは一致しない見解が示された部分もあったが、これらは白薩日娜氏の論文があげた成果とその学術的価値を損なうものではないと判断した。

#### 【最終試験結果の要旨】

公開審査に引き続き、最終試験として、審査委員一同は、白薩日娜氏のアンダーソンの想像の共同体論の扱い方をめぐり、作業理論として用いる理論が結論を構成するための枠組みとなり、論文全体の研究結果をもって想像の共同体論が中国の民族創造を説明することに成功することを目指そうとする意図が理解できない、果たしてそのような結論はこの研究で必要か、と尋ねたところ、結論の指摘された部分に論じたことは、この研究での結論には不要な部分なので、結論の一部とする考えはない、との回答が得られた。審査委員一同は、この回答を踏まえ、当該の問題が白薩日娜氏の論文があげた成果の学術的価値を損なうことはないと判断した。

**【審査委員会の所見】**

以上により、審査委員会は全員一致で本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値するものと判定する。